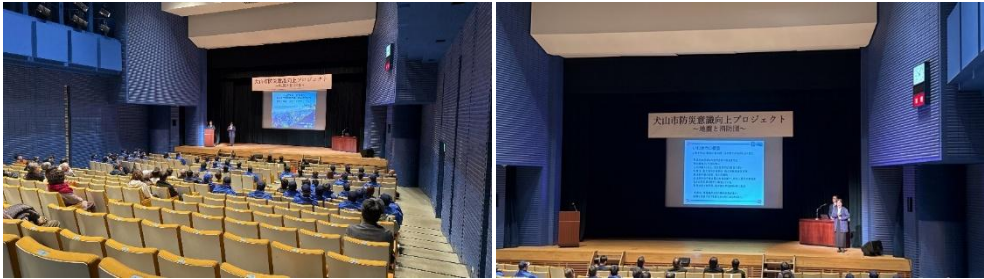


開催地名	愛知県 犬山市
開催日時	令和7年2月16日(日)10:00～11:30
開催場所	犬山市民文化会館
語り部	平山 和哉(福島県いわき市)
参加者	114名(市消防団員66名、市消防職員10名、市民38名)
開催経緯	犬山市では南海トラフ地震の発生が危惧されている中、地域と密着した地域防災力の要である消防団員数の減少が課題となっています。過去に地震等の大きな災害に被災したこともないため、大規模地震災害の実体験に基づく講演を聞く機会を設け、市民の防災意識向上と消防団員の確保を目的とし開催しました。
内容	(1) はじめに ① 自己紹介 私は福島県いわき市の小名浜消防署副署長、消防司令長として防災・救助活動に携わっており、震災当時は消防指令課で119番通報の対応を救急救命士として行いました。 いわき市は東日本大震災で震度6強を観測し、8メートルを超える津波に襲われ、死者468名を出しました。この震災から14年が経過しようとしていますが、改めて当時の状況を振り返り、防災意識を高めることの重要性についてお話ししたいと思います。 ② いわき市の特徴 いわき市は昭和41年に14市町村が合併して誕生し、現在の人口は約33万人で東北地方で2番目に多い都市です。市の東側はすべて太平洋に面し、湾岸線は南北60km以上に及びます。気候は比較的温暖で、冬でも雪がほとんど降りません。 (2) あの日のこと ① いわき市における被害の概要 震災当日、いわき市では震度6強を観測し、津波は体育館の屋根ほどの高さにまで達しました。第一波よりも第二波・第三波が大きく、特に満潮と重なった第八波が最も高かったとされています。 亡くなった方のほとんどは65歳以上であり、20歳未満の犠牲者は15人でした。震災発生時は、日本で最も長い190秒の揺れを観測しました。当時、震度4程度の地震が1週間ほど続いていたため、津波注意報を出す準備やブリーフィングを行っていました。 揺れの最中は通報がほとんどありませんでしたが、揺れが収まった瞬間に通報が一斉に入り、深夜まで対応が続きました。内容は、水道管の破裂、ブロック塀の倒壊、道路の陥没、橋の崩落、津波で車が流された、火災の発生など、多岐にわたりました。津波の引き波で、瓦礫や家屋が次々と海へ流されていきました。 亡くなった方の9割は津波の犠牲者であり、消防団は搜索活動や避難所運営に奔走しました。 ② 災害対応と活動 1. 火災対応 震災当日に7件の火災が発生し、津波の被害を含めると合計で16件の建物火災が発生しました。停電からの復旧時にブレーカーを上げた際に出火したケースがあり、地震後の火災対策の必要性を痛感しました。 最も大きな火災は、鎮火までに16時間を要し、数十棟の建物が焼失しました。被害拡大の要因として、以下の点が挙げられます。 ・瓦礫や船舶が道を塞ぎ、通常5分で到着できる場所に30分以上かかった ・断水により消火栓が使えず、川や海から水を確保する必要があったが、津波の影響で水位が変動し安定した送水が困難だった ・倒壊家屋や散乱した瓦礫がホースを切断し、消火活動を妨げた ・津波警報が発令されるたびに消防隊が撤退を繰り返したため、消火活動が遅れた 2. 救出活動 静岡県からの消防隊や消防団の応援により、約100名の生存者を救出しました。津波で流された車両や倒壊家屋の下敷きになった住民の救助が相次ぎました。 発災2日目以降、断水により13万世帯が最大1ヶ月間水道を使用できない状況となり、給水車

	や入浴サービスの支援を受けました。さらに、広域搬送により東京都や富山県の医療機関へ44件の患者搬送が行われました。 スーパーなどの物流が途絶え、支援物資が届いたのは発災3日目以降でした。避難所では、消防団が中心となり避難所運営の支援を行いました。東京消防庁のハイパーレスキュー隊も駆けつけました。 ガソリンが不足し、移動手段が制限される中、捜索活動が続きました。「もうダメかもしれないけれど、せめて見つけてあげたい」という遺族の声に応えることができず、非常に悔しい思いをしました。そこで、せめて遺族の気持ちを慰めようと、遺品(アルバムやランドセル)を玄関先に置くことを行いました。翌日にはそれらがなくなり、代わりに感謝の手紙が置かれていたことが印象的でした。 (3) 災害に備えて 震災から1ヶ月後、再び震度6弱の直下型地震が発生し、土砂崩れや道路の陥没が発生しました。この経験から、いわき市は「逃げ遅れゼロ」「災害死ゼロ」を目標に掲げ、以下の備えを推奨しています。 1.自家用車の燃料を常に満タンにしておく(ガソリンスタンドが被災すると給油ができなくなるため) 2.ハザードマップを事前に確認し、避難経路を把握する 3.防災情報を積極的に収集する(携帯電話が使えなくなった際のために、防災ラジオを活用) 4.早めの避難を心がける(発災直後は自助・共助が最も重要) (4) まとめ 1.地震後の火災対策を強化することが必要である 2.「逃げ遅れゼロ」「災害死ゼロ」を目指し、迅速な避難を徹底する 3.生きる希望を決して捨てず、前向きな行動を心がける 4.自分自身の判断と行動が、自分の命を守ることにつながる 災害はいつ起こるかわかりません。しかし、備えと意識を持つことで、多くの命を守ることができます。本日の学びを生かし、一人ひとりが防災に向けた取り組みを実践していきましょう。 
開催地より	東日本大震災の実体験を写真や動画を使用し、非常に分かりやすく講演していただきました、犬山市でもいずれ起こる大規模災害に備え、平時から備えておくことの重要性を痛感いたしました。